

◇講演◇

幼児の才能開発



牛 島 義 友

偉人と才能教育

「幼児の才能開発」ということでお話をするわけですが、いわゆる才能教育というものは、それをしたから立派な人間になったとか、あるいは、しなかったからだめなんだ、というようなものでもないで、単純に肯定してはいけません。

そのことについて二、三事例をあげてみますと、有名な数学者のパスカル（一六二三年生まれ）ですが、この人の父は、フランスの役人で技術屋でした。パスカルが七歳の時、息子の教育のことを考え、役所をやめ、自分が家で教育をした。子どもが大きくなってから、できるだけ正確なものの考え方ができるような理性

の訓練が大事であると考え、食事の時間などに、つめこみでなく、ゲームなどの方法で教えた。それから、自分で考える習慣を身につけるように、文法を徹底的に教え、数学などは教えなかった。しかしパスカルは十二歳のころに、一人で幾何の問題を勉強して、自分でいろいろと考えながら、たとえば「三角形の内角の和は二直角である」と、自己流に証明したというのであります。これなんか徹底的に幼児教育をし、そして立派なパスカルという哲学者、数学者を生み出した例かもしれません。

次に、ジョン・ウエスレーという人ですが、この人は、イギリス人ですが、学校へはいかず、家で教育を受けた。父がラテン語とギリシャ語を教え、母がそれ以外の課目を受け持ち、午前三時

間午後三時間勉強したというのであります。

次に、有名なカール・ウィッテという人の話がありますが、この人は一八〇〇年ごろに生まれたドイツの学者ですが、この父親は、この子のための、この子の教育について、千ページ以上の本を残しています。

今でも時々引用されますが、これによりますと、普通は幼児時代は子どものすきなように遊ばせておけばよいというけれど、それはまちがっている。やはり小さい赤ん坊の時から、見たり、聞いたり、触れたりということを通して、計画的に指導し教育しなければいけない。たとえば、赤ちゃんが指をつかんだら「ゆび」というように、ものの名前をちゃんと教える。そしてだんだんに、人差し指とか中指というように、かえていって教える、この場合、決して、いわゆる赤ちゃん言葉などは使ってはいけない。

また、知識のことでなく、「しつけ」というような問題も、非常に手を加えてありまして、たとえば、コーヒーを飲むしつけの場合に、お客さんに行って、うっかりしてミルクをこぼしてしまった時、母親は家に帰ってから、その子にパンと塩以外はやらなかった。そのようにしてコーヒーの飲み方のしつけをしたといえます。三歳ごろから、博物館などいろいろなところを見学させたり、あるいは友だちはえらんで遊ばせたりした。

またそのころから読み書きを教え、自分でものを知ろうとする

力をつけさせた。この結果六歳ごろにフランス語を始め、約一年で読めるようになった。次はイタリア語をやり、六ヶ月で読めるようになり、次に英語、ラテン語というふうにして、八歳ごろには、ホーマーだとか、ブルータークだとか、キケロなど、それほど困難なしに読んでいたのであります。九歳の時に、ライプツヒヒ大学で特別の試験を受けさせてもらって、大学の入学が許可された。十三歳で哲学博士という称号をもらい、十六歳で法学博士となり、ベルリン大学の教授にもなったといえます。これは才能教育をして成功した例ですが、天才教育の世界的な例として、すでに古くからいわれていたのであります。

ところが一方では、意外に、世界的な偉人といわれている人の中に、小さいころにたいしてそういう教育をうけなかったところか、ほとんど先生からも認められず、こんな子はとてもしようがないというふうに見られていた例がたくさんあります。才能教育をうけたところか、こんな子にはやっとならなうがなうといわれた人たちです。

たとえばベートーベンなどの場合、彼は幼児のころ、先生のアルブレヒト・ベルガーという人から、どんなに仕込んでもとても作曲家になることはできない、などといわれたのです。ニュートンも、初級クラスでは、成績は最下位だった。落ち着きのない、不勉強な生徒だといわれていた。ダーヴィンも同じですね。先生

からも親からも、この子は並の子だ、いや並よりちょっと低い子じゃないかと思われていた。

最近では、例のウインストン・チャーチルは、バブリックスクールのハーローに入学する時に、ラテン語の答案は文字が書いてなく、ただしみしかついでいかなかった。とてもそんな成績では入学できないのですが、校長先生の特別の配慮で入学が許可された。最低の成績でハーローに入学し、五カ年間というものは、ほとんど成績は上がらなかった。スポーツなどもへたで、さっぱり目立たなかった。しかし、ときどき妙なことでえらく頭角をあらわし、たとえば、マコーレーの「古代ローマの歌」という千二百行の詩の暗唱の時には、全校一の成績を示した。そういうムラはありましたけれど、要するに、小さい時から立派な教育をうけて、その結果、頭角をあらわしていたという例でもないですね。

そんなような例は非常にたくさんありまして、たとえばナポレオンは、世界第一の偉人ですが、この人は、よく、字を書くことつづりを間違えたというのです。しかも字がへたでした。うれにすごく無器用で、石を投げてもらった方向にとばなかった。また、よく彼が馬に乗ってさっそうと走っている姿が映画など出てきますが、実際は乗馬も不得手でした。このように文字がうまく書けなかったり、運動能力が悪いということは、かるい脳障害の特長ですが、事実彼は、てんかんをもっていた。にもかかわ

らず、世界第一の偉人とされています。

知能の発達過程

運動機能

このようにいろいろの例にもあるように、単に才能教育というものがある、天才を生む条件になるかどうかはわからないし、また効果的であるとはいきけません。しかし、事実として幼児期にのびる能力というのがあります。幼児期には、運動能力が急速に発達します。ですから、この時期にたとえば数学なんかを教えただけで無駄で、それは本当の才能教育にはならないですね。

運動能力が、知能の発達の一基礎になります。第一は感覚運動機能——あるいは知覚運動機能とでもいいですか、そういうふうな面が、まず知能の最初のものである。ピアジェなどの新しい知能の考え方では、やはりそういう点を強調しています。

これは、運動というと、ただ筋肉の動きのように思うかもしれませんが、視覚、目でコントロールされる運動になるわけです。敏しょうに行動するというようなことは、ただ筋肉だけの問題ではなく、むしろ、目が歩哨の役として行なう運動調節の問題、そういうような運動機能などが、まず知能のもとになります。全身の運動、一定の目標に向かって全身の運動で反応する。たとえば、獲物に向かってとびつく。ネコは小さな時からネズミをとっ

てくる。人間がそういうような正確な運動をすることは、とても三歳や四歳の子どもではできない。もし、幼稚園などで運動機能の訓練をしている時に、ネコやサルが参観に来たら、とてもわれわれははずかしくてやっけていられないと思うんですね。彼ら動物たちのほうが、よっぽどうまいから。

鬮牛の牛が、あの赤い布に向かって突進する時のねらいは決して間違っていない。牛の動きは正確で、きわめて敏しょうである。ただ彼は、本当の敵は赤い布の後ろにいるんじゃない、その横のほうにいるんだということが、わからないわけです。そういうことは、いわゆる大脳の働きが判断する。したがって人間ならば、あそこにある赤い布をねらったらいけないんだ、あの端のほうをねらえ、というように修正をすると思うんですね。そうすると鬮牛士はたちまち殺されてしまいますが、牛にはそういう大脳を通しての反応がないわけです。だからいつもおろかな反応をしているようですが、しかし、あの動作は実に敏しょうです。人間は幸か不幸か、大脳が発達したために、実に単純な反応はかえって敏しょうでなくなっただけです。

こんなわけで、人間の子どもというのは、全身の運動はどうも無器用です。しかしまた、同じ運動でも、指の運動というのは、大脳の運動領域の部分が発達し、成熟しないと十分できないらしい。たとえば、指を一つずつ数えるように折ってみる、というよ

うなことを子どもにさせても、三歳児ですとなかなかむずかしくて、できる子もいるが、できない子のほうが多いですね。

動物園に行つてサルのオリのをぞく場合、サルのあの敏しょうな動作をみて感心するより、むしろ、サルに向かって指を折つたりしてみせるとよい。そうしたらきつと、人間でなんて器用なんだろう、自分たちにはとてもあんなまねはできないなんて思つて、ソッポを向くかもしれない。こういうことは意外にむずかしいことです。

さらに、指で一つとびにたたいたり、あともどりしたり、一定の速さでいろいろなところを押すというようなこと、たとえばピアノを弾くという動作は、大脳の発達とも関係があり、かなりむずかしいことで、動物にはとてもできない。サルは、物をつかむかはなすかしても、ピアノを弾くときのような動作はできない。そして、こういうものがどうやら自由にこなせるためには、人間でもおそらく十歳ぐらいまではかかると思う。かなり高度の訓練を必要とする基礎的な能力です。またあるいは、筆を持って、それも筆をつかんでじゃなくて、何本かの指で筆を持ち、一定の方向に、力の加減をしながら動かして字を書いたり、形を描くということはむずかしく、五、六歳の子どもで、やつと四角形や菱形が描ける程度です。

ですから、そういう、運動機能の訓練というようなことを、ま

ず最初に、いわゆる知能の訓練の前になければならないのである。精薄者の治療の場合、特に言語障害をもった子どもの治療の場合、昔は、いきなり、どうして声に出せるかとか、音を聞かせるかという訓練をしたのですが、このごろは、その前にすることがある。平均台の上をよく歩かせるとか、あるいは、手や指の運動のような、運動機能の訓練をまずさせなければいけない。いわゆる教育以前の訓練です。そういう子どもは、こうした点に障害があつて、その先ができません。したがつて、ここから訓練をやらなければいけないというようなことがいわれます。ですから、幼児期における才能教育としては、指の訓練から始まるといつてもいかもしれないし、先ほどもいいましたように、字や絵のようなものを書いたり、あるいは、ピアノを弾くということの重要性が、あらためて考えられてくるのであります。

知能（言葉・音楽的才能）

この指の訓練にくらべて、言葉のほうは、むしろ先になりまゝです。言葉は、むずかしいように思いますが、実はそうではなくて、言葉を聞いたりしゃべったりということは意外にやさしいことなのです。

十ヵ月ごろから言葉を言い始め、その後約三年間学習し、四歳児になりますと、もうどの子も実によくしゃべっています。親の

いうことも先生のいうこともよくわかるし、自分たちの生活に関連して意志の表現が自由にできる。なにも幼稚園に入つてはじめて言葉をならうんじゃない。あるいは、発表の仕方ならうわけではない。なかには、家ではしゃべれるけれど、幼稚園ではしゃべれない子もいますが、ともかく、家庭の中ならば、子どもは自由になしゃべっている。むろん理解もしている。十ヵ月から始めて三ヵ年ぐらいの教育で、言語の発達は一応でき上がつています。だから言葉は、指の訓練よりやさしいといえるかもしれない。

言葉は、いつ教えるかという点、十ヵ月から三歳ごろまでの間に教える。それで十分おぼえていくわけです。しかし、実際には、いつ、だれが、どのようにして教えていくかという点、これは一定の授業時間内ではなく、一日中、機会あるごとに、だれかが、親が、別にカリキュラムがあるわけではないが、個別的な子どもへの語りかけによって教えています。

子どものそばに、言語的なバック・ミュージックとして言語が流れておれば、子どもはしぜんに言葉を覚えるか、というところではない。

赤ちゃんのうちはどうしようもないが、十ヵ月ぐらいになつて「ウマウマ」なんていうのがわかるようになると、おかあさんは必ず子どもにむかつてこの言葉を中心にして、「さあ、ウマウマ

ができましたよ」とか、「ウマウマ好きでしょ」というように「ウマウマ」という言葉がくりかえされる。そういうことから言葉を感じる。

子供の理解に応じて、一つの言葉を中心にして教えていく。母と子がマン・ツリー・マン方式、一対一の形で、そして子どもにわかることを中心にして教えていく。これが、子どもが言葉を感じる条件です。もし、そのような一対一の人がいなければ、言葉の発達はおくれまします。

この場合に、ただ偶然にいろんなことを教えるよりも、すこし計画的に、いろいろな物の名前、野菜の名前、さかなの名前などを教えれば、もっとよいかもしれない。まあ、そこまでしなくてもいいですけれど、したらもっとよく才能教育らしくなるかとも思うのです。

本来、母国語というものは放っておいても覚えるから、なにも無理して教育的に考えなくてもいい。むしろ、教育的に考えるならば、この際、外国語をひとつ入れたらどうだろうか。英語を四歳ごろから入れる。二、三歳から入れたって悪くはないのですが、一応ある程度日本語がわかった時に、しかも、固定化しない時に、外国語を教える。日本語を完全にマスターしてしまって、中学生になってから教えたってだめで、子供の能率はあがらない。まだ日本語が完全でないようなところに、もう一つ外国語を教

えますと、子どもは二つの言葉を同時に覚えてしまいます。二重言語ですね。そういうことになれば、それはたいして子どもに負担にならずに、しかもすばらしい効果をみる事ができる。二重言語がいいか悪いか、いろいろ問題になるのですが、将来、日本人のものの考え方に幅をもたせらうと、やはり国際語を一つマスターしなければならぬというならば、むしろこの時期にやったほうがいいということが考えられます。

言葉を覚えるためには、大脳の側頭葉に聴覚の中枢があり、言語中枢は、普通の人ならば左のほうにかたまってくる。この言語中枢が左側にかたまってくるかどうかということが、言語の発達に非常に関係があるといわれています。これが十分きまっていなると子どもはどもりになるといわれます。

言語の中枢が左の側頭葉に定着してくると、右の方はリズムを理解したり、メロディーを聞いたたり、というような音楽的なものの中核になるといわれています。言語が三、四歳までに非常に発達するので、このころに音楽的才能もまた発達します。もしその時に音楽的なものをどどんと教えていくと、言葉と音楽才能がうまく発達していく。すくなくとも幼児のこの早い時期に音楽を教えたために、負担過剰になるといってはいけません。

このようなわけで、言語ならびに音楽の教育というものは、二歳ごろから、三歳、四歳のあたりにやるのがよいと感じられます。

す。

少し例が悪いかもしれませんが、知恵の遅れた精薄児は、普通の文化財に対しては一向に反応しません。絵本を見せても喜ばない。お話をしてもあまりよくわからない。ところが音楽だけはふしぎにわかるらしい。テレビで音楽をやると、彼らはいろいろな動作をしながら喜んで見る。精薄児でも音楽はわかるのです。したがって音楽がわかる知能というのは、精神年齢でいえば、二歳、三歳というところで十分なのです。

ともかくこの時期の子供に一番よくわかる芸術は何かといえ、それは音楽なのです。ですから早い時期に、ちょうど言葉を聞き分けると同じように、幼児に、メロディーを聞き分けさせたり、音の調和、ハーモニーなども、正確に教えこむ、ということが大事なことです。こういうことこそ、ほんとうの才能教育ではないかと、私は思っている次第であります。

長いことありがとうございました。

(青山学院大学)



日本保育学会第二十四回大会

会場 東京家政大学

期日 五月十五日(土)

十六日(日)

記念講演(十五日)

西独キリスト教保育連盟指導主事
エリザベート・シュブランガー氏